

『華嚴經』における諸仏と世界

周 夏

はじめに

漢訳八十卷『華嚴經』（以下『八十華嚴』）第二章の名称は「如来現相品」（以下「現相品」）であり、藏訳は *De bzhiṅ gshegs pa*（如来）である。この章は漢訳六十卷『華嚴經』（以下『六十華嚴』）第二章「盧舍那仏品」の一部におおよそ対応している。「現相品」は『八十華嚴』の第一章「世主妙嚴品」（『六十華嚴』では第一章「世間淨眼品」、藏訳では第一章 *Jig rten gyi dbang po thams cad kyi rgyan gyis tshul rab tu byung ba*）に引き続き、菩提道場に菩薩衆や諸天などが集結した後、これから世尊が説法を始めようとするところから展開されるのである。

章名に現れる「現相」は漢訳『八十華嚴』のみに見られるが、それがいかなる意味を示すかはいまだ明確ではない。この章の内容に対する考察によって、「現相」の意味および『華嚴經』における諸仏と世界の関係がより明らかにすることができると考えられる。

「現相品」の科文

世尊が菩提樹の下で悟りを開いた直後、普賢菩薩は諸菩薩や諸天などを率いて、仏の功德を褒め称え、道場を莊嚴した。その後、世尊が大衆の心中に抱いている三十七（『六十華嚴』では三十二、藏訳では四十二）の疑問に答えるために「蓮華藏世界海」を示現した。『八十華嚴』において蓮華藏世界は後の第五章「華藏世界品」（『六十華嚴』では第二章「盧舍那品」の一部、「藏訳華嚴」では五から九章までの内容に当たる）にて詳説されるが、「現相品」では蓮華藏世界の十方にある世界海・仏国土・如来及び菩薩衆が紹介される。

世尊は諸世間主による多くの疑問を心で感知し、それらの疑問を解明するために齒間から様々な光明を放出した。光明から蓮華藏世界が見え、自然に発した声によって語られた偈文が聞こえたという。そして、光明に励まされた菩薩衆が十方から毘盧遮那如来のところへやってきて、如来の十方に

『華嚴經』における諸仏と世界（周）

坐った。次に、世尊の面前に大蓮華が現れ、法勝音菩薩を中心とした菩薩衆が世尊の白毫から現れ、蓮華の中央に坐し、世尊に加持され、偈文を語った。その後、蓮華の花弁に座する十方世界を代表する菩薩衆が次第に讃仏偈を唱えた。

より詳細な科文は次の通りである。

一 世尊が菩薩衆の疑問を解き明かす

一・一 世間主たちが心で抱く問い

一・二 世尊の説法を請い求める

一・三 世尊による光明の示現

一・四 蓮華蔵世界の顕現

二 蓮華蔵世界の周囲の様子及び十方からやってきた菩薩たち

二・一 東の世界

二・二 南の世界

二・三 西の世界

二・四 北の世界

二・五 北東の世界

二・六 南東の世界

二・七 南西の世界

二・八 北西の世界

二・九 下方の世界

二・一〇 上方の世界

二・一一 無尽な世界から菩薩たちの雲集

三 聴法の集団の大いなる歓喜

三・一 あらゆる門を通しての激励

三・二 衆生への果報

四 菩薩たちによる世界及び如来への賛歌

四・一 仏前に現れる蓮華及び世尊の白毫から顕現する法勝音菩薩

四・二 十方世界を代表する十大菩薩による偈頌

科文に挙げられる「蓮華蔵世界の周囲の様子及び十方からやってきた菩薩たち」の項目においてそれぞれの方角については、世界海・仏国土・如来・菩薩の順に沿って逐一語られたのである。そこで世界と諸仏の関係が世尊の見せた映像を通して示された。

「現相」の意味

「現相品」の偈文において「相」について蔵訳は次のように言及している。

諸仏の不可思議な色身を見てみよう。

歡喜の海も生起し、法の力は増長する。

あらゆる相をとって、諸仏が十方世界に生起するすべての微塵に入る仏雲もこのように見える⁽¹⁾。

この箇所「相」はあらゆる仏国土に住する多くの仏身を指すことが分かる。そして、それらの相が数えきれないほどあらゆる国土において見られる。

蔵訳になく、漢訳にのみ存在する「現相」という言葉は如何なる意味を示すかについて、中国華嚴宗第四祖澄観は、『大方広仏華嚴経疏』（大正一七三五）において、次の五つを挙げ、説明している。

- ① 十方から説法の聴衆を集めるために口から現わした光明
- ② 説法の主を示すために眉間から現わした光明
- ③ 大衆に説法の開始を知らせるために現わした刹網の振動
- ④ 殊勝なる果報を示すために現わした仏前の華
- ⑤ 教えが仏説であると示すために白毫から現わした諸菩薩⁽²⁾

澄観は「相」を仏の姿としてのみ解釈したのではなく、「現相品」における世尊が口および白毫から放った様々な瑞相や、集まった聴衆なども含めて理解したようである。

はじめから第二章までの経文において世尊が一言も発しなかったことは注目されるべき点である。世間主たちの疑問に對して、世尊は言葉ではなく、視覚的な映像をもつて答えた。それは、「現相品」で光明が言葉と同じ効能を有するものとして、「説法」を行う際に極めて重要な役割を果たしていることを物語っている。

「現相品」における如来

『華嚴経』は、周知のとおり釈尊が成道後二七日に自内証の法門を開示したものであるとされている。しかし、菩提道

『華嚴経』における諸仏と世界（周）

場にて説法を行った世尊とは如何なる者かについての明確な記述は『華嚴経』において見つからない。この問題について中国華嚴宗の諸師の説も様々である。その中の多くは毘盧遮那仏が説法していると主張するものである。一方、僅かながら、説法しているのは釈尊であると主張するものもある。

三論宗の大成者吉蔵は、著作の『華嚴遊意』（大正一七三二）において、当時の中国に並存する二種の説について言及している。吉蔵は、地域によって、南方と北方の二説に分けている。南方の説は、『無量寿経』と同じく、『華嚴経』は娑婆世界において他の国土のことを語る形を持つているため、釈迦が語り手であると主張する。それに対して、北方の説は三身説を用いて、化身仏釈迦の報身仏として、毘盧遮那仏が蓮華蔵世界において『華嚴経』を説いたと主張する。吉蔵は自らの観点を提示し、釈迦と毘盧遮那は「一」であり、「異」であり、「亦一亦異」であり、「不一不異」であると主張している。これは後世に至って、華嚴宗における代表的な考えとなった。

蔵訳の偈文では法身と色身の関係について、次のように述べている。

仏陀が住する諸々の法には相がない。
智地を獲得した者は世間の導師を見ることができ⁽³⁾る。

（中略）

『華嚴經』における諸仏と世界（周）

法身は差別がなく、虚空のようで、無碍なものである。
色身は幻影であり、光り輝く相そのものである。⁽⁴⁾

（中略）

清浄なる仏の法身は清らかな虚空のようである。

色身もまた現され、この法性に入り込む。⁽⁵⁾

色身と法身の「二身論」について言及する經典は『菩薩瓔珞本業經』や『大智度論』などが挙げられる。「現相品」において、法身は虚空のように目にする事ができないため、色身を通して視覚的映像によって衆生に感受させ、そして色身によって説法が行われると語っている。よって、「現相品」に現れる、相を持つ蓮華藏世界およびその十方世界にいる諸仏のすべては、色身仏であると理解できるだろう。

「現相品」における菩薩

「現相品」では、蓮華藏世界の十方の仏国土を代表する十人の菩薩に率いられる菩薩の集団が毘盧遮那仏の元に集まり、その後、仏前に大蓮華が出現し、世尊の白毫から法勝音菩薩と十方世界を代表する十人の菩薩が現れ、順次に偈頌を唱えたと記述している。菩薩たちの唱えた偈文は『八十華嚴』および藏訳に一致するものの、『六十華嚴』では法勝音菩薩および北方を代表する菩薩の唱えたものしか見られない。また、毘盧遮那仏の元に集まった菩薩たちの名号と後に法勝

十方世界から毘盧遮那仏の元にやってきた菩薩たち			法勝音と共に現れる十方世界を代表する菩薩たち		
六十華嚴	八十華嚴	藏訳華嚴	六十華嚴	八十華嚴	藏訳華嚴
東 觀勝法妙 清浄王	東 觀察勝法 蓮華幢	chos kyi dpal padmo rnam par blta ba'i rgyal mtshan		觀察一切 勝法蓮華 光慧王	chos kyi dpal padmo rnam par lta ba'i rgyal mtshan
南 清浄海慧	南 普照法海 慧	chos rnam par snang ba'i blo gros		法喜慧光 明	chos kyi mtsho rnam par snang ba'i blo gros
西 香焰平等 莊嚴月光	西 月光香焰 普莊嚴	spos 'od 'phro ba'i rgyan zla ba'i 'od		香焰光普 明慧	spos 'od 'phro ba'i rgyan zla ba'i 'od
北 師子光莊 嚴	北 師子奮迅 光明	seng ge'i 'od zer snang bas mthu 'byin ba'i blo gros	師子焰光 奮迅音	師子奮迅 慧光明	seng ge 'od zer snang ba'i mthus 'byin pa'i blo gros
東南 無盡勝燈 功德法藏	東北 最勝光明 燈無盡功 德藏	chos kyi yon tan gyi mdzod mi zad pa'i dpal gyi gzi brjid mar me		法海慧功 德藏	chos kyi yon tan gyi mdzod mi zad pa'i dpal gyi gzi brjid mar me
西南 普智光明 慧燈	東南 慧燈普明	ye shes kyi 'od zer shes rab kun nas sgron ma'i blo gros		慧燈普明	ye shes kyi 'od zer shes rab kun nas sgron ma'i blo gros
西北 無量華照 垂髻	西南 普華光焰 髻	me tog kun nas 'od 'phro gtsug phud rab tu 'phyang ba		華焰髻普 明智	me tog kun nas 'od 'phro gtsug phud rab tu 'phyang ba
東北 無盡清浄 光明王	西北 無盡光摩 尼王	'od zer dang gzi brjid mi zad ba'i rgyal po'i blo gros		威德慧無 盡光	od zer dang gzi brjid mi zad pa'i rgyal po'i blo gros
下 光照分別 法界	下 法界光焰 慧	chos kyi dbyings su 'od 'phro ba rnam par snang ba 'byung ba'i blo gros		法界普明 慧	chos kyi dbyings su 'od 'phro ba'i rnam par snang ba'i 'byung ba blo gros
上 無障礙力 精進慧	上 無礙力精 進慧	stobs dang brtson 'grus chags pa med pa'i blo gros		精進力無 礙慧	stobs dang brtson 'grus chags pa myed pa'i blo gros

音菩薩と共に現れる十方世界を代表する菩薩たちの名号について、漢訳の『六十華嚴』および『八十華嚴』において異なった訳語が用いられているのに対して、蔵訳では同じ訳語が使われている。つまり、漢訳では毘盧遮那の元に来聴する菩薩たち（科文の「二」に現れる菩薩）と世尊の白毫から現れる菩薩たち（科文の「四」に現れる菩薩）が別人であると扱われているのに対し、蔵訳では前後に出現した菩薩たちのほとんどが同一のものとされている。⁽⁶⁾（前頁の表を参照）

むすび

『八十華嚴』の「如来現相品」は『華嚴経』の説法の前置きである。この章において、前後に世尊の口と白毫から現された光からなる様々な相より、蓮華蔵世界の周辺にある諸々の国土が示現された。また、菩薩たちの讃偈から、『華嚴経』に説かれる無尽なる世界観や仏身観、また、仏の法身と色身の関係などについても語られた。ここから普賢菩薩が「一切如来浄蔵三昧」に入り、出定し、菩薩の集団に対して『華嚴経』の世界観を説き、やがて毘盧遮那の蓮華蔵世界について詳説をしたとの話へと展開していくことになるのである。

「如来現相」は Thomas [1993] によって 'Appearance of the Buddha' と訳されている。⁽⁷⁾氏は如来が自らの相を現わすと理解したようである。一方、澄観の註釈に従えば、「現相」は「蓮

華蔵世界およびその周辺の様々な相を現わす」との解釈が得られる。

『華嚴経』の説法をなす世尊は毘盧遮那なのか釈迦なのかについての議論は後世において多々に行われてきたが、『華嚴経』そのものにおいてはこの問題は明確に触れられていない。むしろ、この問題は、『華嚴経』においては意識して避けられている嫌いがあるように考えられる。

- 1 東北四四、八二頁表。北京七六一、八九頁表。
- 2 現相五者。一現面門光相。召十方衆。二現眉間光相。示説法主。三振動刹網。以警群機。四佛前現華。表説依果。五白毫出衆。表教從佛流。

3 東北四四、八一頁表。

4 東北四四、八三頁表。

5 東北四四、八一頁裏。

6 「蔵訳華嚴」では南方を代表する菩薩の名号のみ僅かな相異がみられる。

7 Thomas Cleary, *The Flower Ornament Scripture: A Translation of the Avatamsaka Sutra*, Shambala, Boston, 1993.

〈キーワード〉 華嚴、如来現相、毘盧遮那

（愛知学院大学大学院）